

どうすれば言語哲学者はクリプキ意味論を超えられるのか

小山虎（慶應義塾大学非常勤講師）

なぜクリプキ意味論を超えなければならないのか。この問いは、論理学者からすれば、わざわざ答える必要すら感じない自明な問いかもしれない。クリプキ意味論にどれほど価値があろうとも、それはひとつの意味論にすぎず、それだけが唯一の（あるいは「正しい」）意味論とみなす根拠はどこにもない。したがって、そのほかの意味論の研究は当然行うべきである。

一方、言語哲学者は違った反応をする。クリプキ意味論は、可能世界という形而上学的にやっかいな概念を前提しているという意味で、超えるべきものである。だが、言語哲学的観点からすれば、様相語法を備えた言語の意味論として代わりになる理論は何もないのが実情である。つまり、クリプキ意味論を超えることができればそれに越したことはないのだが、まともな代替理論が存在しない以上、いくら超えたくても超えようがないのである。

こういった言語哲学者の意見は、論理学者には奇妙に聞こえるかもしれない。また、そもそも上の記述は厳密には正しくないだろう（論理学者か言語哲学者かで意見がきれいに分かれるはずがない）。とはいえ、これに極めて近い意見の相違があることはまぎれもない事実であると思われる。本発表では、この相違を論理学者と言語哲学者の意味論観の違いに結びつけることにより、言語哲学者にとってのクリプキ意味論の位置づけについて論じる。

両者の意味論観の違いを単純化すればこうなるだろう。論理学者にとって意味論とは、論理体系の性質（完全性など）を知るための理論であるのに対し、言語哲学者にとって意味論とは、言語（主に自然言語）とそれが表している内容のつながりを知るための理論である。この違いにより、両者が扱う意味論の範囲も異なってくる。たとえば、代数的意味論が論理学ではふつうに現れるのに言語哲学で論じられることがめったにないのは、このためだと説明できる。

この意味論観の違いは単なる分野による用語の違いではない。どちらの意味論もタルスキの真理定義に由来する。つまり、タルスキ意味論は、論理学者にとっても言語哲学者にとっても意味論なのである。また、言語哲学者がクリプキ意味論を特別視しているように見えるのも、このことと無関係ではない。言語哲学者は、タルスキ意味論が自分たちの目的にかなっていると考えているがゆえに、様相語法を備えた言語の意味論はクリプキ意味論によって与えられると考えているのである。

しかしながら、この二つの意味論観の関係が厳密にはどうあれ、様相語法を備えた言語にクリプキ意味論以外の意味論を与える可能性が排除されるとは思われない。たとえば、まずホモフォニックな意味論を与えた上で、メタ言語で現れている様相語法の「意味」は論理学者にとっての意味論を与えることで説明する、というハイブリッドな理論も可能だからである。